
月までどうぞ 一緒に

愚図

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月までどうぞ 一緒に

【Nコード】

N9978Z

【作者名】

愚図

【あらすじ】

きみを たべる ゆめをみた

あなたに たべられる ゆめをみた

(前書き)

きもちわるい感じです たぶん

すれた感じの男の人とがきくさい女の子の
こないだの夢のはなし
夢ってふしぎですね
知らないことも知ってるし
知ってることを知らない
はつきり覚えてたり
だんだんうすれたり
しまいには夢自体自覚してなかったり

いつこまえと同様クズです

あなたにたべられるゆめをみた。

普段の無邪気さは何処へやら、突発的に電波ポエマーのような言葉を吐く幼女もとい少女を私は見詰め、一拍遅れて聞き返しました。彼女は私の腹の上に乗り上げ、私の行動及び呼吸の自由を奪うだけに飽き足らず、貴重なそうとても重宝すべき睡眠時間をも躊躇せず破壊してしまつたのですから、私の機嫌は良い訳もなく、口調は荒れてしまいました。が何の事はありません、いつも通りです。すると彼女は望みもしないのに常と変わらぬ破天荒な少女へと戻ってしまいました。

「だからあ、あなたがね、わたしの腕とか足とかをね、ばくりつて食べてしまつたの。こう、ばくつて何にもおかしくないって顔でね。それなのに全然痛くないんだよ、ねえねえ、すごいでしょう？」
「……って、聞いてる？」

「あつそ」

私の至極当然とも言つべき反応が不満だつたのでしょうか、あるうことか彼女は私のまな板ほども無い薄い腹筋の上で跳ね始めました。私は彼女を精一杯の力で跳ね退けようと腕を振るのですが如何せん、病み上がりに加え強制的に寝起きの状態なものですから力など入りようもないのです。抵抗を諦めればその負荷はそれ程のものでもなかったため私は自分の愚かさを知る羽目になりました。

「わかつたから退け。後で遊んでやるから今は寝かせろ」

「あ、あなたはまたそうやってわたしを子供扱いする！ わたしはとっても真面目なのに」

子供のする夢の話が真面目な話なものですかと私は内心彼女を罵りますが口には出さず彼女に負けて差し上げます、しかし私の表情はそれに関しては豊かなのです。彼女はひとしきり暴れた後に私の

顔を見て不満そうに頬を膨らませました。これだからいつまで経っても子供のままなのですと私は何から何まで発展途上の彼女を見ながら溜め息を吐くのですがそれもまた彼女を煽ってしまったようで私の腹から退く事もなくついと横を向いてしまいました。その顔立ちは愛らしさしか持ち合わせない小学生さながらですし、起伏の穏やかな体つきも何とも言いがたく幼く見えます。女性であると言うのに彼女に性欲のひとつも沸かない私をおかしいと言う方はいますが、この如何にもな幼児体型に反応してしまえば私がロリータコンプレックスの変態となってしまうのではないのでしょうか、それは由々しき事態です。そろそろこの軽い体重にも慣れてきまして、ひとつ欠伸をして目を閉じてやればいとも簡単に意識が睡眠を欲しくれます。

そういえば私も妙な夢を見たのだと思い出しましたが気付けば彼女が私の腹で眠っていました。三十分もない睡眠時間に見た夢など覚えている訳ありません、私は彼女の小さな体ごと自分を起こしました。彼女の呟いた名前、いや寝言には敢えて聞かないふりをします。

抱き上げてみても彼女が一向に目を開かない事を私は自分の都合の良い方に受け取ります。私は彼女に無二の信頼を得ているのでしようそうに決まっています。時たまもぞりと体をくねらせるのですが寝息は一定でした。私は無意識にその呼吸に合わせて呼吸をしています。私は普段彼女にするよりも懇切丁寧に扱いました。小さいからだけでは言い訳にならない程に、厭に軽い体が恐ろしくて仕方が無いのです。私の体もそう大きい訳ではありませんむしろ華奢と言えるのですがそれに軽々と収まってしまう体はやはり年不相応に小さいのだと改めて実感させられました。いつものように動き回らずただ呼吸しかしない体は、きっと私が軽く力を込めただけでぼろぼろになるのでしょうかと考えている自分が一番嫌でした。

彼女のベットに寝かせ、布団を掛けたところで私は夢を思い出し

ました。

きみをたべるゆめをみた。

足の小指を舐めてみると少し塩辛いのがやけに現実的でした。彼女は私が思うよりほんの少し大人びた身体を震わせます。そして私は自分の唾液でべとついた彼女の足に齒を立てました。彼女は何も言わずに何も感じずにそれを見ているのです。私はそれから舐めては噛み付き噛みちぎりそれを咀嚼し飲み込む作業を繰り返しました。不思議な事に骨はスナック菓子の様な食感をしていて、それ以外は本物に近いというか本物の肉と皮とその他諸々の感触でした。どうしてそれを知っているのかは考えたくも無かったのでやめておきます。血は流れますが彼女は何だか嬉しそうですねで食べる事は続けました。膝から下が無くなると彼女は服を脱がすように私に促しました。そうでした服があると食べられないではありませんかと私は彼女の洋服を、まるで純情な性行為を始めるが如く脱がせます。彼女の身体は子供と大人の中間、少女らしい体つきでした。大人びている様で出来上がってはいない、仮にも女性の全裸に興奮しないのには流石に自分でも不安になってしまいます。

膝から下のない足を持ち上げ内股を舐めると彼女は身をよじりました。膝は骨も無くなり血を垂らすだけのどうあってもグロテスクな有様だと言うのに気持ち悪くはありませんでした。それよりも私は目の前にある彼女の秘部が気になってしまふのです。下着まで脱がせたのが悪かったのでしょうか、私は自分の夢ながら訳がわからなくなっていました。ですが私は彼女を食べる事を止めません。太股が無くなった彼女は常識的に考えれば生きている事も有り得ないのですが、彼女は生きていました。食べるためと自己に言い聞かせ彼女の秘部に舌を入れると彼女は高い声で喘ぎます。これを生きていると言うほかないでしょう。その反応ですとか感触は流石に私を圧迫しました。生唾を飲み込んでから、私の唾液と血と彼女のそれ

で汚れた場所に噛み付きます。少しぐったりとしてしまった彼女の頭を撫でると彼女は笑いました。早く食べてよ、と。

誰の何も触れた事のない子宮を私は食らい、いやに綺麗な腸を食べました。臓器はゴムのような感触がしましたが味は美味しかったような気がします。彼女はとうとう頭だけになりましたが、心臓だけはのこしていました。馴染み深いリズムで伸縮する心臓は、もうどこにも繋がっていないというのに運動を繰り返しているのが私を安心させます。私は彼女を殺していない。彼女は自分の心臓を見ながら、私に食べられたのです。心臓は一口で飲み込みました。

それは全部夢なのですから私が欲求不満だという事や彼女に対して少なからず異質な執着を抱いていることは一目瞭然です。彼女の髪を撫でる今の心が穏やかなのは、先刻の夢で彼女の全てをこの身に収め彼女が自分の物だなどと誤解しているからなのかもしれません。彼女が全く逆の夢を見たからかもしれません。私は寝返りをうち布団から出そうになる彼女に布団をかけ直しました。夢の中で満足している内は、私もまだ甘い感情に吞まれているらしいと安堵します。どうせならこんな欲もなくなるくらい、彼女に甘く出来れば良いのに、と柄にもなく考えました。

「あなたは凄く幸せそうにわたしを食べたのよって、わたしは今更ながら報告するけれどあなたは聞いてる？ あなたがあんまりにもわたしの話を聞こうとしないから、こんな時間になっちゃったね。まあわたしがしつこいからだろうけどここはあえてあなたの所為にするよ」

彼女は着衣したまま風呂場にしゃがみ込み、私の頭を泡と共にマツサージします。爽やかな柑橘系の香りに少しうつとりしていると彼女は唐突に言いました。私は彼女を食べている間幸せだったのでしょうか、夢の中、しかも同じ夢といえど彼女が主観の夢ですから私にはその感情を図ることは叶いません。かゆいところはありませ

んかあ、と腑抜けた美容師の物真似をする彼女に、私はふざけて返します。ありませエん。ふふ、と楽しげに笑う彼女の指先は、少し伸びた爪のせいかちくりと時たま私の頭皮を刺激します。これを育毛への効果があると前向きに捉える辺り、私は彼女にとっても優しいのです。

「くあ」

「おつきな欠伸だね。わたしの話、暇なのかな。でも学校とか、そんなあなたに話したいくらい楽しかったり嬉しかったり悲しかったりする事がないんだよね」

そう言った彼女は何だか年相応に思えましたが顔は見えません。

私は彼女を子供だと思い込んでいるから、彼女の容姿が一層幼げに見えるのではないかと私は考えます。周囲の人間が言うには、彼女は確かに小柄なものの私程の意識はない様なのです。つまり彼女は私の前でだけこんなにも幼稚なのでしょうが、それとも単に私が彼女に敵しいだけなのでしょうかと私は少し悩みましたが、ながしますねえとまた安い物真似をする彼女はやはり子供にしか思えませんでした。私だつて知っているのです、彼女が女性である事も私自身が彼女という女性に惹かれていることも知っていますがそれでも彼女が幼く見えて仕方がありません。だからといって私は幼女趣味ではないのですそう決して。

「もう帰るのか」

「まあわたしにもお家があるからね。いつもあなたがしてくれるみたいに、あなたが寝るまでいてあげたいところだけど、ふふ」

私だつて寝るまで側にいて欲しいのですとはきつと私が私である内は言う事が出来ないのでしょうか言うつもりはありません。私は私の濡れた髪を梳る彼女を睨みつけて言います。

「何、上から言っただよ、ちび」

「上からなんて言ってないよー！ しかもちびとか！ もやしの癖にわたしが気にしてる事を言うなんて！」

「お前、人に言えたことじゃねえだろうが。誰がもやしだ誰が！」

わざわざ言わなくても良いことばかりを叫ぶ彼女と声のよく響くバスルームでひとしきり口喧嘩をした後、私は溜め息を落とし、目をつむりました。彼女は私の髪をタオルで拭き、また櫛で梳きながら、良いにおいだねとつぶやきました。このシャンプーもリンスも彼女が揃えたのですから彼女の好みである事はわかりきっています。がそれでも少しは嬉しく思います。

「ねえ、夢の事なんだけれど」

またその話かと私はそれこそ夢心地で彼女の話に耳を貸しました。いつからこれが、彼女に髪を洗われる事が私の中でさほど珍しくもない事になったのでしょうか。そもそも私が彼女と出会ったのはいつでしょう、遠いにも程がある様な過去ですから記憶は限りなく曖昧ですが、彼女は長らく私に懐いていました。特にここ何年かは、彼女と頻繁に交流をしている気がします。

「わたしね、多分あなたになら食べられてもいいかなって思ってるよって、僅かに心中を吐露してあげるね」どうか、と彼女は小悪魔的に笑ったつもりでしょうが私から見れば悪戯をする子供のようです。

食べられたいだなんてそれが貴女のきもちの僅かなものですかと私は彼女に内心で指摘しながら何も言わずに呼吸を繰り返します。あなたはどうかの、と聞いてくる彼女にもやはり何も答えません。私は思っていました。彼女を食べて完全に一つになれば私は幸せなのでしょう、と。ですが私はそれを否定します。何故かと問われればそれはひどく現実的、食事は確かに体内で私の養分と化しますが大部分は排出物となり大概に流され、養分ですら時とともに私から無くなる訳ですし脳みそや心臓、あるとすれば魂を頂いた所で彼女の思考を手に入れることは不可能です。ですから彼女を食べたとしても私達は一つになれないむしろ結果としてはカニバリズムを含む殺害行為でしかありません。ですから私は彼女を殺すましてや食そう等とは思いません。これを要約すると、つまり私は彼女を殺したくないし死んで欲しくもないのです。

「……帰るんだろ、暗くなる前にさっさと行け。俺は送ってやれないから」

「うん。うへへ、あなたは実はとっても優しいもの。素直に帰るよ」
「うつせ。きもい笑い方すんなし」

私が赤くなる顔を湯舟に沈めて誤魔化すと、せつかく拭いたのにと彼女が喚きます。構わず私は彼女に別れを告げました。彼女がまたねと名残惜しそうに笑うのが目に浮かびます。また、がいつかも解らないくせに、私は口の中でマタイマショウを転がしました。約束なんてしていい立場では、関係ではないのです。ですから私はいつも電話でもメールでも、マタネと笑えません。それは、彼女も同様に。その言葉が泡になって消えてしまったとき、彼女はもう私のパーソナルスペースから遠く遠く離れてしまっていました。私はいつもこれが、この空虚間が恐ろしくて仕方がないのですが、私にはどうする事も出来ません。ままならない、と私はまた、温いお湯に浸かります。清潔感のある柑橘系の香りは、私の心を擦って消えませんでした。

(後書き)

実はちょこつとだけ実話

このあいだ　あの人を食べる夢をみました

ここまでひどくはないし

最後まで食べ切れませんでした

なんだか気持ちのいいような　わるいような
けれど少し安心する感覚でした

食べて、手に入れて　自分のものにして

安心したのかなあ　と聞いてみたら

あの人は　あなたの指をたべながら
あなたに目玉をくわれた　なんていう

え　なにそれ　きもい

としか言えない事をいいやがりました
どうでしょうほんとうなのでしょう

どちらにせよあの方はきしよいですね
わたしもきしよいですね

では

乱文失礼しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9978z/>

月までどうぞ一緒に

2011年12月30日22時45分発行